

変動する中東域内関係

— I S後のシリア、イラクとエルサレム問題を中心に

千葉大学法政経学部教授
酒井啓子

- *退潮著しい I S
- *勝ち組クルドを巡る抗争
- *神経尖らせるイスラエル
- * I S掃討でイランがシリアに進出
- *サウジで起きた大きな変化
- *米国大使館のエルサレム移転
- *懸念されるイランに対する恐怖心
- *サウジ新政権の安定度
- *シリア空爆に法的根拠はない
- *シリアは分裂状態が続く



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

本日はすっかりおなじみになりました千葉大学の酒井先生においでいただきました。今日は朝から南北首脳会談で持ち切りですが、世界的情勢の中では相変わらず中東が大きな火薬庫になっていますし、日本とも関係が深く、それからいろいろな面でたいへん複雑な様相を呈しております。ですから、目先のメディアに惑わされるだけではなく、やはり中東は注視していかなければいけないテーマだと思います。そういうことで今年も酒井先生に国際情勢の中での現在の中東についてお話しいただきます。それは酒井先生よろしくお願いいたします。（拍手）

酒井 たいだいまご紹介にあずかりました酒井でございます。今お話がありましたように世間

の目はすっかり朝鮮半島情勢に寄っていると、中東の話をしてはなかなかピンとこないところがおりになるかもしれません。実は中東ということであると、5月になるといろいろなイベントが予定されております。たとえば今日も最後にお話をさせていただきますが、トランプ大統領がイスラエルのアメリカ大使館を現在のテルアビブからエルサレムへの移転を実行するのが5月です。さらに5月12日には、アメリカがイランとの核合意の枠組みから離脱すると言われています。また、同じ5月12日にイラクで国会選挙が実施されます。このイラクの国会選挙の動向も、これが今後イラン寄りの政権がますます強くなっていくのか、それとも多少ニエートラルな政権になるのかということが注